

藹々居士編選

豆州熱海誌

戊寅九月
真誠社
不盡閣
同梓

熱海誌題詞



負山抱海形勝雄異人
流謫長此中一洗簪紳華縉習
別開霸府無限功武門執
權今已矣地出靈多永不已
治效神奇甲技業年三救活

熱海誌
中村敬宇先生題詞

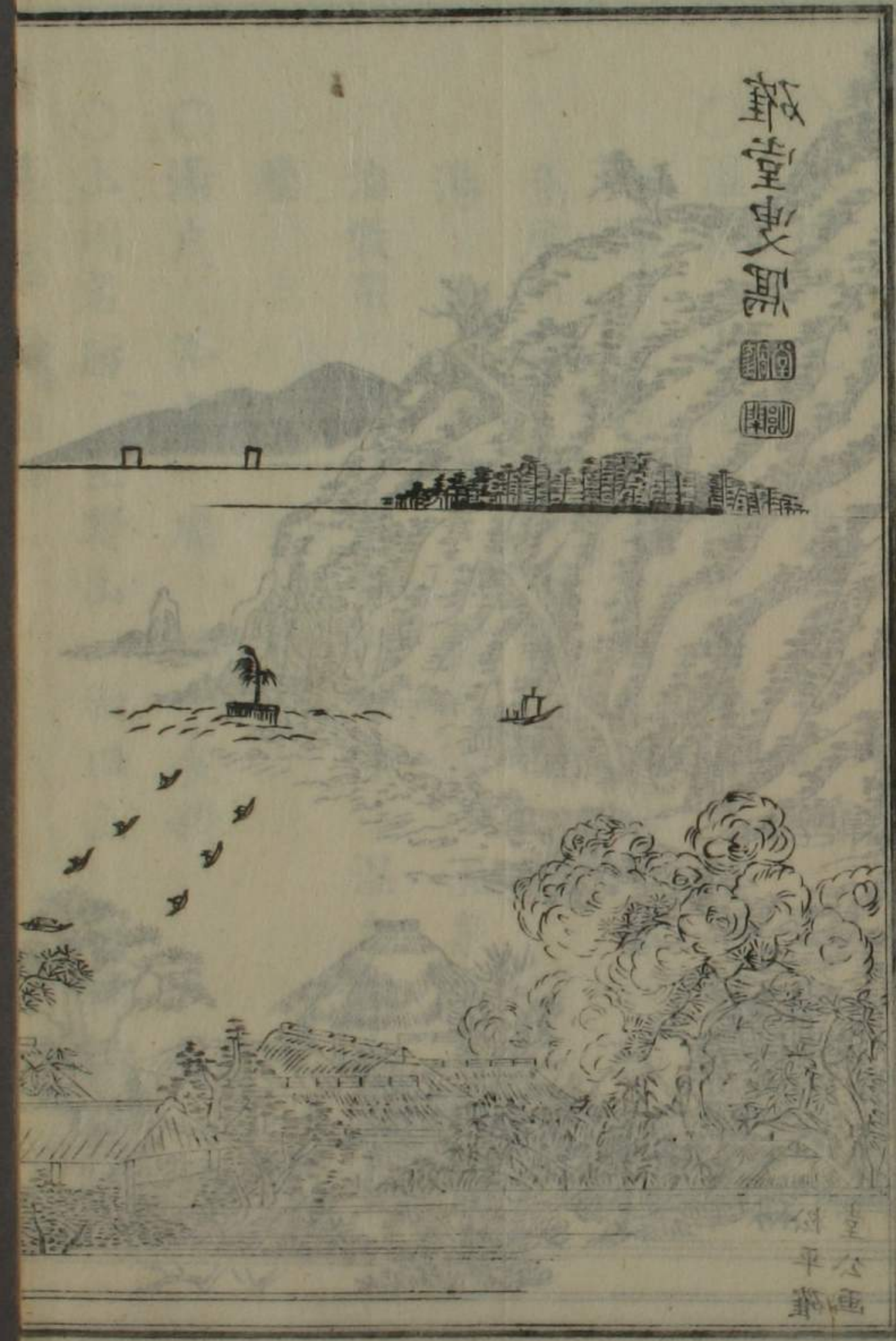
東坡詩
第人死。昔有七象。今倍蓰。
田疇所穿。見清泚。況有好
景。怡心目。造物布置。物乃
爾。江珠。六月。晁。譚。金。朱。
以甲第。汗成。浴。競。來。此。地。取
休沐。冠。蓋。車。馬。未。追。尋。招。引

王公輕羈旅。賺得洋商。
傾囊貯。况療其病。施以恩。權
勢何敢讓。霸府。我久欲往。浴
靈泉。菴。途。局。促。苦。無。緣。忽
讀。巖。公。好。記。筆。遊。意。勃
然。骨。款。僊。我知溫泉有神道。

借手大難廣其傳。人間勢
力浮漚耳。嗟汝熱海有
真權。

明治十一年八月二十日

江都敬字中邨正直



敬堂史歌

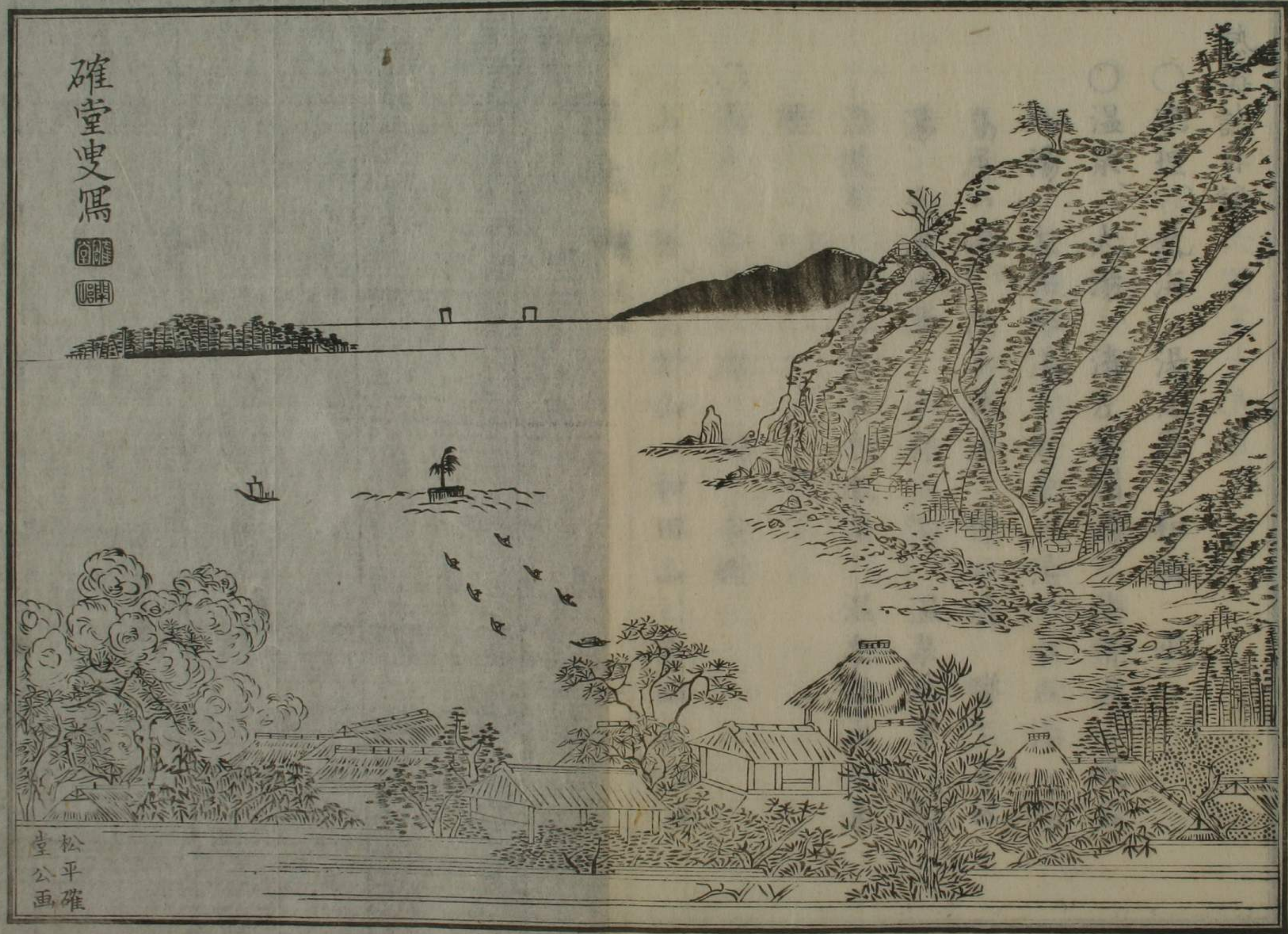


畫
平
兼

眞權

明治十一年八月二十四日

江都敬字中邨心直



確堂叟寫



松平確
堂公画



熱海誌目録 六冊五十五目

○地理、熱海 湯瓦原 和田 水口

○温泉、大湯 清左衛門湯 法齋湯 風呂

の湯 左治郎湯 野中の湯 水の湯 福

島屋の湯 勘兵衛湯 仲の湯 醫王寺の

湯 古屋の湯 小林の湯 温泉性質 主

○治效用、浴法及ハ内服法 温泉湧出の来

歴

○湯戸、浴室 席山 婢 食料

○山川名勝、上野山 和田山 念佛山 魚見

入山 天神山都松旧跡 糸川 初川 和田川

錦浦観音窟 日金山十國峠 伊豆山古々井の森

網代港根越観音 初島 鸚鵡石 一杯水

○社寺并行政、湯前社 来宮 和田八幡

今宮 天神祠 紀僧正真濟畧傳 温泉寺藤房入道略傳

興禪寺雲居略傳 海藏寺 醫王寺太田駒千代墓 潮

音寺 大乘寺 誓欣院 行殿舊趾

○産物、樟材什器 雁皮紙 壁土 赤石脂

塩温石

以上六綱五十九目



州豆熱海誌

○地理

熱海郷を伊豆國加茂郡葛見の庄に係る昔は湯瓦原

和田水口三ヶ村を合せ田額六百四十三石二斗九升

九合一斗六升六合と稱し葦山代官の治に属し海山

の賦も皆伊豆神社の社領たり而して今は耕地九十

町餘宅地十町餘山林未詳民戸三百三十餘戸をべて静岡

縣の管轄に属す抑伊豆の國を東海道の東南隅に突

出西北に富士山を受け北に箱根の嶮を負ひ東南

東京 藹々居士編

西の三面を皆大洋をめぐり一國の形勢斜にして且
 は細く周圀六十餘里とを之を君澤田方加茂那賀の
 四郡に分ち國中甚だ高山多く殊に天城真城達磨日
 金伊豆等の諸山其脈互に相聯絡し山溪海岸慶々よ
 温泉湧出し其數ほとんと二十餘ヶ所に及ぶ即ち古
 奈修禪寺船原吉奈湯ヶ島土肥二條手石蓮臺寺横川
 湯ヶ野小鍋奈良本松原畑毛大澤峯伊豆山熱海等亦
 れあり然れを此國と伊豆と稱するは湯出の國の約
 言よして本邦温泉の出る所頗ぶる多しと雖とも實
 此國を以て第一とを而して熱海の泉その名尤

も世より知られ治病の効も亦著るしといふ
 ○熱海郷を豆州一國の東北隅伊豆山の南日金山の
 東麓より北の方小田原驛と距る亦と七里西の方
 三島驛へ五里南下田港へ十八里と距つ三方山とを
 ぐる三冬と雖も北風及び西北風の暴烈あると
 拒ぎ唯東南の一隅は蒼海を開き常に新鮮なる海風
 と受く故に其氣候温和にして夏冬ともに甚だ其寒
 熱と凌ぎ易しとを正面海路三里をへだて初島と翠
 浪白波の間を望みそをより南十數里あり遙に
 大島と水天髻弗の際に見る

○湯瓦原村（磯山の里と称せしとあり然るは
 今を兩名皆称せざ（今と距る三百五十年前まで湯瓦
 湯前神社造営の棟札に依りて知らる此（單は熱海村と
 札今富士屋喜右エ門の所藏は孫る（是則ち温泉湧出の本
 称し和田水口二村を属里とせ是則ち温泉湧出の本（里あり街區十一よ分つ本町濱町新宿荒宿横町新横
 町東阪町小澤二軒茶屋上宿大をあり（此他横磯比良
 保等ゆ小名はり都て和田村と片平は本里の南（五十三區よりあり民戸凡四十餘農夫漁者雜
 七八町念佛山の麓はあり民戸凡四十餘農夫漁者雜（居さる其西北五六町入山は傍ふて人家凡そ十三四
 戸らると水口村とを人民ふふ耕樵を兼ね而して本

里を民戸凡そ二百七十八戸農工商賈漁夫樵者軒と
 聯ねて雜居し稍小聚洛の体裁をなせり

○温泉

温泉湧出の原地昔七湯と稱す即ち大湯清左衛門
 湯法齊湯風呂の湯河原の湯左治郎の湯野中の湯二
 れあり而して今を處々は新泉湧出し則ち水の湯仲
 の湯福島屋の湯勘兵衛湯醫王寺の湯古屋の湯小林
 の湯等をべて十五ヶ所とあり此他海岸田園到る處
 にはりに深く之を穿てて温泉湧出をざる亦し真は
 熱海の称は背りてと謂つべし

○大湯 本町の上手西側は在り晝夜各々三回時を
 違へどして湧く但時ありて長湧もるおとらり長湧
 を概祿十二時間とせ例へど午前六時は湧出れど午
 後五時ニ至りて止む長湧止めど又十二時間長休を
 則ち午後六時より翌日午前五時ニ至るまで一滴を
 も出さざるが如し其後五七日間湧出の度量常あら
 ざ凡そ十日を過ぎて始めて常ニ復き其湧出づるや
 初め疊石の間は於て蟹の目の如くは煮立ち漸く湧
 て遂は沸騰せしに至りては恰も數箇の大唧筒を以
 て熱湯を灑ぎ出せが如く二三間へたりたり大石

は熱湯を吐く其勢は響きは雷の如く蒸氣を雲
 の如く濺沫熱雨とふして近前をべりて故は四方
 數歩の地木柵を廻らして其危害を避く聞く支那國
 安州の潮泉を一日は三溢三蘸一撫州は一日三潮の
 泉あり蜀は六時泉あり滇中は百刻泉あり又瑞西國
 のエングストレーブリュチン泉を毎年五月中旬より
 八月中旬まで毎日午後四時より午前八時を限りて
 湧出し以て太利國のウイラフリニアフ泉を一日三回
 時期を定めて湧き佛蘭西のコルマンあり或る温泉
 を毎七分時間は流出せと然れども本邦に在りては

熱海の外き、此の如き温泉ありと聞かむ蓋しウア
 ルトン氏の温泉論に依れば此の如き温泉を必き海
 邊に近くして數派も出路を開き其中の一箇を海中
 より口を開き満潮の時其泉口海水は壓塞られたる流出
 づる水と能く却て其水槽に流反り出路を他口より
 取て噴出せしめよて此等の泉と名けて間泉と稱せ
 といふ昔を温泉沸畢る比に至り甲蟲數千群り翔り
 遂は熱湯に混じり流を去り然るに文化の頃僧徳
 本行院開基一其奇怪にして且つ懲れむべき状あり
 と以て梵法を修し浮屠を建しとり此蟲再び出たむ

といふ里俗相傳へて靈感と云ふ石浮屠今尚柵中
 あり又其傍は石佛數軀を安置せ僧觀誓東京茂草寺主等
 の建る所といふ又英國三ニストルライトオノレ
 グルアルコツク氏万延元年七月此泉に浴し建る所
 の石碑あり數十言を勒せ愛山海奇勝之餘建此石使
 後人知英人遊于此自吾輩始の語あり
 ○清左衛門湯 濱町の北裏天神山の後より晝夜
 流ねに湧出た絶へて下皆相傳ふ昔は農民清左衛門
 出の泉窟に陥りて死せり故に名く
 ○法齋湯 又平左衛門湯と稱せ小澤より故にま

小澤の湯と称を泉源二ヶ所一ヶ澤口彌左工門の
 宅地あり一と藤井文次郎の庭中湧く義堂日工
 集り曰く義堂と夢窓疎石の法嗣應安八年二月二十六日飯罷與
 諸子出遊或村巷或僧舎有道人指一地曰嘗平左工門
 肆虐為害據此地造館臨誅屋陷地中人皆云活墜地獄
 至今呼曰平左工門地獄と蓋し此泉窟と云ふ歟
 ○風呂の湯 阪町大木圓藏高砂屋との庭中湧出
 ○河原の湯 東の濱邊に在りもと瓦の湯と称を蓋
 一寛文六年小田原城主稻葉美濃守村民の為に浴室

と構へ瓦を用了其屋を葺り故に里俗呼了瓦の湯と
 称せしとぞ
 ○左次郎の湯 濱町醫王寺の門前上杉助七の庭中
 あり此湯専ら眼病と治を故に眼の湯と称也又湯
 火傷と洗ふて奇効ありといふ
 ○野中の湯 小澤の北上野山の麓ある田畝の中に
 あり晝夜湧出まれども人浴せざ此辺地を穿てて隨
 處熱泉湧出也
 ○水の湯 阪町芥川文平若松屋の庭中湧り淡泊
 無味常水温めたる者の如し故に名を

○福島屋の湯 阪町風呂の湯の東隣松尾惣兵衛

屋福島の庭中湧く

○勤兵衛湯 濱町醫王寺の門前左次郎湯の隣家山

本五兵衛と江戸屋の宅後在り

○仲の湯 濱町高橋松吉の宅地より今そ并屋某

云り ○醫王寺の湯 二泉より近來す一泉を得たりと

云 ○古屋の湯 内田市郎 ○小林の湯 人見 等みふ其庭前

は湧出を故より名く

○温泉性質 各所に湧出せる温泉大小深淺各々其

差あき非どと雖よりきべて清徹明淨よして臭氣

おく其性不功用に至りて水湯を除くの外各泉大

同小異皆其味ひ苦く且つ鹹也蓋し此温泉を含塩

鑛水よして其中多量の格魯兒亞爾加里及び格魯兒

土類少量の硫酸塩類を含有せりとゆふ其温度を湧

出の時間随ひ又その泉窖に随ひて少差あき非

むと雖どり大凡皆沸騰點以上達せざるを嘗

て司藥場は於て教師マルチン氏の分析せし所の定

量表より即ち左よ出を

七

鑛水一千立方センチメートル即ち一リートル
中左の成分と含む

格魯兒曹胃母	三七九〇〇
格魯兒麻偓涅叟母	二、三三三〇
格魯兒剥篤叟母	一、八一〇〇
格魯兒加爾叟母	一、七六七〇
硫酸石灰	〇、一九三〇
重碳酸石灰	〇、〇〇四二
重碳酸化鉄	〇、〇〇三一
珪酸	〇、〇一〇〇

第一格魯兒滿電

痕跡

有機物

痕跡

貌魯繆剥篤叟母

同

貌魯繆曹胃母

同

總量一〇〇一〇三瓦蘭

○主治効用 古来諸家の説區々より予の醫學よ
通ぜざる固より其何れも據るべきと知らざれとら
今且らくドクトルホフマン氏の説に依れば此温泉
の主成分を食塩より格魯兒剥篤叟母格魯兒麻偓
涅叟母と少しく含めり其他の元素を甚少分より

了敢て效用とあまよ足らざまとも令曾て久しく經
 験せし歐洲中の温泉の尤も類似なる者も就き其主
 治効用を示さむ小児の腺病及び之より生ずる諸症
 風濕及び慢性の痛風及ぶ的の堪べき熱度と後了力の
 の百四度列氏の炎性滲出は於て其炎既退くの後
 三十三度まで也
 滲出物の吸収と催進を脈管外水液漏出及び通常の
 水腫は於て又吸収と催進するの効あり脚氣の水腫
 と兼り者皮膚の神経痛等も皆あめ泉は浴をべし又
 慢性曹傷風及び慢性下痢慢性の咽喉及び氣管支傷
 風慢性膀胱傷風慢性腔及び子宮傷風
 浴法及び陰門注射法と並用

もべ膽管の慢性傷風慢性の胃及び腸傷風より發せ
 る鬱憂症等にて殊に其運行怠慢おし皮膚或は粘
 液膜の弛緩せしめよ兼て此泉を飲料とせよと
 要すと又近江の中島桑太氏の説は依れ慢性癩麻
 質斯癩瘰脚氣麻痺病癩毒眼病子宮病皮膚病及び皮
 膚の衰弱は因りて發する所の諸病と治し又之を内
 服せむ緩軟下痢と起し胃の運營を進め飲食の消
 化と促りし肝脾及び腹間膜等の閉塞を疏通し兼て
 血脈の循環と健まるといふ釋惠頓の紀行泉谷瓦に
 曰く試把草花竹葉浴熱湯則萎亦侵水一箋茶時則忽

生色復水一浴者不復墜散と抑靈泉の徳より非情の植物も及ぶ歟

○浴法及び内服法 病症及び身体強弱の差異はるは随て其温度及び入浴の度数時間等も差異あるを得ざると雖ども今且らくドクトルホフマン氏の説に依るも大凡温度を華氏の寒暖計九十八度より乃至百度即ち列氏の二十九度乃至三十度と以て適宜とす毎日一回乃至二三回入浴し時間を十五六分より乃至三十分時を以て適宜とすべし又おれを内服せざる者も四号乃至十二号 一号は我々の七五分六厘五毛餘あり

凡そ一合五勺より乃至四五合と一日の量とす毎日すべし以て適宜とす 一 一二回おれを服す但毎朝或は朝夕に於て單に之を用ひずして水を加へて之を飲むべしと浴後速に衣服を着し決して直に外氣に觸れざるを要す浴者慎んで一時の小快を取り温泉浴治の效用を損むる勿れ又浴客の切に注意を要すべきことあり即ち浴は謂ゆる湯中におれを蓋し温泉論を案するに温泉も固より衝動鎮靜排泄等の種々の直接ある作用を有す 一 又間接に専ら變質の効用を有するものあり 一 若誤りて俄に多量を服し或は一時に數回入浴せら

ときは忽ち浴熱病即ち湯と發し食欲減損衰弱過度
 脈行頻數皮膚乾燥發熱眩暈等の諸徴と来し又ブシ
 ドラシアセルフリスト稱する浴疹と發するものと
 り而して俗説之と治病の効能をいふをその初徴
 とあるもの多しと雖ども是れ決して然るは非ず故
 にも一此の如き証徴と認むるときは且らく其入浴
 或そ内服の數量を減し又數日間全く停止すべきと
 而して予この泉は浴する者と數旬且つ諸浴客の經
 験せし所と聞し十中の八九を皆その泉は浴する
 こと兩三日よりして飲食頗り不進と殊は渴と催ふ

おと甚たり而して凡そ一週間を過れば飲食の量
 たりめて本は復し病症を稍重きを加ふるに似たり
 故に俗説は曰ふ第一週間は病と出し第二週間は病
 と治し第三週間は疲勞を補ふと是れ此地數十百
 年来の經驗は係る所なりを記して以て浴客の参考
 として供せざるべからざらむ

○温泉湧出の来歴 古来諸説紛々而して概ね皆荒
 唐は属する里俗相傳ふ仁賢天皇の四年蚊島穗允君罪
 たりて獄死を然れとも逆鱗を犯し未だ止まず其屍を
 豆州熱海海底に沈めしめたり此時始めて此海

中^{ちゆう}は熱湯沸出^{ねつとうふい}して魚鱗介^{ぎょりんけい}甲^かを爛^{らん}死^しするを發見^{はつけん}せ
 りと准^{じゆん}后親房^{ごうしんぱう}の記^きは伊豆風土記^{いずふうどき}と引^ひて云^いく人皇^{にんかう}四
 十四代元正^{じゅうじゅうだいげんせい}天皇^{てんかう}養老^{やうらう}年間^{ねんかん}開基^{かいき}を而^{しか}して其^{その}説^{せつ}す
 未^まだ詳^{しょう}りありに其^{その}後^ご天平^{ていへい}勝寶^{しょうぼう}元年^{げんねん}己丑^{きしう}箱根^{はこね}山^{やま}金剛^{こんがう}
 王院^{おういん}第四^{だいじゅう}祖^そ万卷^{まんせん}上人^{じゆんじん}上人^{じゆんじん}方廣^{ほうくわう}經^{きやう}一^{いつ}万卷^{まんせん}讀^{よみ}誦^{じゆん}滿^{まん}足^{じやく}を故^こ
 を建^たつ弘^{こう}仁^に七^{しち}年^{ねん}嵯峨^{さあが}天皇^{てんかう}の詔^{しよ}は應^{おう}上^{じやう}洛^{らく}をの神^{かみ}宮^{みや}寺^じ
 中^{ちゆう}三^{さん}州^{しゅう}楊^{やう}那^な郡^{ぐん}至^{いた}り俄^がに遷^{せん}化^{くわ}を世^よ壽^{じゆ}斯^しる靈^{れい}湯^{たう}の空^{くう}
 七^{しち}十^{じゅう}九^{きゅう}歳^{さい}箱^{はこ}根^ね桑^{そう}原^{げん}村^{むら}に葬^{さう}むるに世^よ壽^{じゆ}斯^しる靈^{れい}湯^{たう}の空^{くう}
 一^{いつ}く海^{かい}中^{ちゆう}に流^{りゅう}散^{さん}するを惜^{おぼ}み且^{かつ}つ鱗^{りん}介^{けい}の之^{これ}が為^{ため}は爛^{らん}
 死^しするを慙^{げん}む其^{その}泉^{せん}脈^{みやく}を尋^{たづ}ねて之^{これ}を山^{やま}腹^{はら}に移^{うつ}し開^{ひら}
 き其^{その}傍^{かた}に少^{せう}彦^{ひこ}名^な神^{かみ}を祭^{まつ}り藥^{くすり}師^し佛^{ぶつ}を本^{もと}地^ちとして湯^{たう}前^{まへ}

權^{けん}現^{げん}と稱^{せう}せりと其^{その}泉^{せん}を則^{すなは}ち大^{おほ}湯^{たう}として權^{けん}現^{げん}の社^{しゃ}今^{いま}
 は儼^{げん}存^{ぞん}き其^{その}後^ご宇^う多^た天皇^{てんかう}の寛^{かん}平^{へい}四年^{しごうねん}壬^{にん}子^し紀^きの長^{ちやう}谷^こ雄^{ゆう}
 當^{たう}國^{こく}の守^{まも}りとして此^{この}地^ちに來^きり泉^{せん}原^{げん}を採^{たく}らんと欲^{ほつ}して
 深^{ふか}く地^ち底^{てい}を穿^うねり一^{いつ}は數^{かず}仞^{じん}にして大^{おほ}石^{いし}の面^{おもて}に數^{かず}
 穴^{あな}蓮^{れん}房^{ぱう}の如^{ごと}き水の石^{いし}を見るのみ終^{つひ}に其^{その}源^{げん}を究^{きゆう}む
 ると能^{あた}らざるを以^{もつ}て止^とむといふ此^{この}他^た種^{しゆ}々の里^り説^{せつ}あり
 と雖^いども多^{おほ}くは是^これ妄^{まう}誕^{たん}不^ふ稽^き毫^ごも記^き取^とるは足^{たり}る
 るのあり
 ○湯^{たう}戸^こ
 湯^{たう}戸^こ昔^{むかし}を客^{きやく}屋^やと稱^{せう}し今^{いま}井^い渡^{わた}辺^へ等^{とう}二十^{にじゅう}七^{しち}戸^こと限^{かぎ}りそ

の業を営みたりしが今も自由は官許を得ず博く四
 来の浴客と宿泊せしむるを以て温泉宿と
 云ふ其數もべて三十余戸は此中昔時の客屋より今
 戸は過半皆算を以て温泉と浴室は引く即ち今井半
 大夫と稱す社渡辺彦左衛門富士屋喜右衛門不盡間相模
 屋要作露木準三鈴木良三巴屋吾助菊屋五左衛門山
 田屋彦四郎伊豆屋徳兵衛鱗屋平兵衛萬屋義助阪口
 屋富八等は大湯を引き玉屋角玉屋中玉屋小川井屋
 九戸屋大松入江伊勢屋等と河原湯は浴室を客と宿
 せしむ蓋し河原湯は湯壺の傍に一大浴室を構衆客

是は混浴を海岸に此湯を引くる一茅店の浴室小林
 古屋を清左衛門湯を引き且つ各家の庭中湧く所
 の温泉を用ひ藤井澤口山口屋と小澤湯を用ひ此他
 江戸屋高砂屋福島屋等皆各々其庭前湧く所の温
 泉は浴室を又浴室と義立して諸人をして随意に混浴
 せしむる所の四ヶ所即ち温泉寺の隠寮は一ヶ所温
 泉寺主の施浴に係る小澤町新宿本町各一ヶ所みふ
 其町内の協立は係る其他各戸随意に算をこし以
 て自家の用は供するもの牧拳をるは違はるは
 ○浴室 各戸二三室或は八九室々毎に概ね三槽

と置き一を熱湯と引き一を冷泉と貯ひ一を冷熱調
 和して入浴の用は供を又別は一槽を高处に置き底
 或は横は小口を開き栓を用ゐて其開閉を自由とし
 以て局部の定むる患者の滴浴は備ふる者あり近
 古屋市郎左工門一室を設け寛と以て小瀑布と引き
 患者の滴浴は便を故は局部の患者はる人々時々
 其室は入て此法を
 行ふも又可あり
 ○温泉宿の浴客と接する唯其席及び寢食等の什器
 を貸すのみ而して飲食其他もすべて浴客の自辨は任
 ぶ然れむ浴客各自の適宜は随ひ或は手酌の飲食と
 調理一或は婢を雇ふて之と辨せしむるも隨意た

○席は大小あり陋美ありすは浴客の望は任を席費
 一週間金三四十錢たり乃至二三圓の間たるべし席
 已は定むれむ食器茶具煙草盆等日用什器の類概ね
 みふ具不而して是等の器具を別は其損料を収めむ
 唯卧具と其品等は随ひ一週間金三四十錢たり乃至
 一二圓の損料を受く文政十三年七月山東庵京傳此
 温泉図彙によれむ其主より食事と賄へも一たり
 七日の食料一人前金百足湯料と一銀二匁つと
 定ぬと云々と見ゆ僅は四十八又温泉料と一
 九年を距て世事の變遷驚くべし
 日一人金一錢五厘と納ると定む

○下婢をまきべて四十歳以上の老女にして朝来り夕に歸る能く万事は周旋して信實あり一週間金三十錢を給せりと法と也

○食料を米薪塩味噌炭茶の類皆巧くその宿は之を購ひ置き浴客日用の需は應を蓋し魚類を除くの外は一切の物品は本之と他方は仰き山海の嶮を跋渉して齋らる所あれば其價をよき廉あらばと雖ども亦需用は欠る事とあり

○山川名勝

熱海の地もととり山水の美観は富む近傍まこと名勝

舊跡多く記して以て浴客遊覧の便は供せざるべからむウアルトン氏曰く景色の变换も亦一二の疾病を治するの効あり例へば鬱閉症の患者都市を去りて開豁の地に移り周囲の緑陰ある山水の幽景を遍覧して遂に快治するが如くと山川名勝の記ふべきこと能くざる所以あり

○上野山 本町の北野中の湯のやとりと登る深

泉録 林祭酒用韮の紀行前後二は曰く樵徑如線狐兔

交跡披宿莽而上山頂古松數株駢列其下坦夷可坐眼

界夾豁右山左海聚落田疇皆攢一指實為富覽之區而

委之草莽無有顧者豈人情尊遠賤近抑地之頭晦亦有
數耶と真は然り

○和田山 和田村の西南より禿より立るもの
大れあり峻峻のなり易のらば

○念佛山 和田山に連あり海に臨みて臥せ興禪寺
の東數十歩の村路より登る登りて右に折るれを山

頂に至る一望をれを網代初島左右相臨之錦巖突元
として眼下に在り房總相武の諸山遠く雲烟の如く

は出没を還り下りて山盡る所に至れを一茅屋あり
之を魚見岬といふ常は一漁翁ありは在り諸魚の来

往と候ふは釣漁の便と亦絶景あり

○入山 和田山の西北に連り數峯ありび秀づ大幕
小幕等の名あり相傳ふ昔に右大將頼朝陣營と此山

は張れり故に名くと山腹は風神の祠あり

○天神山 入山の山脚より和田水口二村の界に
横たる昔に管公廟と建つ故に名に廟今濱町都松の

旧跡あり伊豆誌に古戦録と引て曰く僧正善祐熱海
に在り時都を戀ひ手り一本の松を植え其枝と都

の方へ推し撓りしつとよく繁茂して三十歩は横
たり枝葉悉く西にあびき侍るも怪しく云れある

話ありとその松枯れて已久し

○絲川 日金山の下より出つ上流と宮川と云ふ

○初川 上流と入川と云ふ鷹の巢山より出づ

○和田川 和田山より出づ此他は細流をべて南

流して海に入る

○錦浦 念佛山の麓を廻り海岸をべて錦浦と称す

蓋し錦巖の靈區あるを以て此名を得たり魚見岬よ

り錦巖に至る海路幾んと半里海岸を石壁奇秀岸

下は碁磐石塊岩烏帽子岩等あり皆その形を以て名

く雀島と名群雀噪ぎ馬背も亦その形を以て名く舟と

進めて馬背とめぐり西は折れを巖腹空洞石門と云

之と狗竇といふ又折れて一大石門を得る胎内く

ぐりと称す小舟と容るべし其巖角と電石といふ紋

理氷裂逆り落んとす其次を則ち錦巖あり絶壁數

刃下は巨洞あり洞中衆石五色錯雜して朝暾は映を

れを燦爛錦の如し岩頂の老松と木根を石は挿さみ

雜卉黄翠その間を弥縫し真に奇觀あり其西石壁を

まぐ峻し洞あり觀音窟といふ其門甚だ窄く中を極

めて潤く且つ邃し一小池あり清泉掬をべし池を隔

て、巖の上は觀音の像と安を承應年間より日蓮宗の

僧某氏の建る所といふ洞中石乳あり又白蝙蝠多し
 境靈ありて久く居るべからず此辺をべて曾我濱と
 いふ故も亦曾我の窟とも称せといふ以上熱海村の
 ○日金山 伊豆山村は属を其絶頂と丸山と称し又
 十國峠といふ熱海村より登るこのて路と上宿の北
 来の宮の東より取る登ること十町石浮屠敷基あり四
 面塔と云ふ昔一僧正真然此に住せりと海正空是
 たり右より折て登る一丁毎に石地藏と安下町敷
 と記せり登る六と十一町四面塔あり戸澤地藏堂と
 是泉隣大徳の開創は係る海大徳の徒空在家僧あり之

と守る令堂宇荒廢觀るべし是より路傍さしに
 雑木の目よさへさるふく羊腸屈曲雲を踏て登る登
 て四十町に至れ日金地藏堂あり此山仁徳天皇の
 御宇松葉仙人といふもの開創を云ふ地藏堂何の
 代に建立せしと詳りり又せむ相傳ふ鎌倉の右大将
 之と中興し且つ田禄を附せりと頼朝覇府と定め
 るおと能くざらと憾之府下は遥拜所と置て日令安
 金地藏堂と称せり旧跡今尚や鎌倉に存せりと日令安
 置る所の銅像を貞享中般若院聖算の造る所脇士
 二童子を傳へて空海の作といふ堂前は閻王及び生
 死河婆の石像あり古削觀るよ足る守者在家僧と

六坊より今て源秀坊道正坊等四箇のみ相傳ふ箱根
の山賊般若院の僧某は化せられ得度して此に住せ
りと堂後又仙人塚あり則ち開基松葉二世欄晚三世
金地三仙人の墳墓ありといふ是より更は登る六と
八町計熱海より通九山の絶頂と云即ち十國峠あり石
りり左の文と刻を曰く伊豆國加茂郡日金山頂所觀
望者十國五島自子至印相模國武蔵國安房國上総國
下総國自辰至申其國所隸之五箇島及遠江國自酉至
亥駿河國信濃國甲斐國天明三年東都林居士諸鳥出
雲光英源清侯等應熱海里長渡辺房求之需建之と讀

了て頭を回ら一望をねむ四眺洞達一駭の眼と
遮るべく西の方富士山高く天半は秀で箱根足柄そ
の北は連なり甲斐信濃の諸山其間に出没し愛鷹山
を其左は時ち三島沼津の諸村碁の如く其麓は布く
官道の松富士川の流遠近斷續駿河の海濱は沿ふ正
面を重寺の湾と隔て真城天城諸山と望み更は頭を
東方より回らせば豆海相洋水天相接し熱海網代伊豆
山真鶴初島の諸勝近く眉間はいつたり五島大島利
島及び房総諸山を遠く雲烟の如く隠現し三浦江島
大磯等其間を點綴し了景趣を添ふ謂ゆる目不周玩

情不給賞_セの真_ん海内_の絶観_{あり}此遊老幼婦女の
如きの竹輿_と儼_ふ乗_るも可_{なり}價金五十錢前後
あつべし然れども夏日_を毒虫多し宜しく心と用也
べきあり

○伊豆山 伊豆神社の境内あり社もと関東惣鎮守
と稱し古来朝野の尊崇篤く別當般若院を走湯山東
明寺と稱し三千の支坊を領し天台真言二宗を兼祜
上下兩社は奉仕せり東鏡脱漏に伊豆神社の七堂伽藍焼失し一昼夜の間炎煙天と
其壯大かると記せり中古以来漸やく衰頽を極あつ
雖ども尚ほ社領三百石を領し社僧十二坊を存し堂

宇時々官費を以て修繕せられたりしが維新以来祿
と失ひ坊を廢し且つ火災は罹りたれ上_の宮のみ
僅_に其趣を存し下の宮を旧墟もす々求_めがたきに
至り嘗て鎌倉の右大臣が千早振伊豆の御山の王椿
八百万代をいろえりたりし續後と詠せられたる
を今も虚言に属せしが如し此辺をべ_る古々井の森
と稱し時鳥の古歌多し其一二を録さば拾遺集は清
原元輔の歌として思ひ申るありあの森の雫はよそ
ある人の袖もぬまきなり」とり後拾遺集は藤原兼
房が五月闇あ_るの森のわとぎ_は人あ_れるのミ

鳴きたる哉同ト大貳の三位が返一は時鳥
 みの森は鳴く聲を聞よそ人の袖もぬれぬり扶木
 集は恵慶法師の人の親のちもふ心やいふあらん
 あゝの森の秋の夕暮等あり社前の石階を下る
 數百級よして海岸は出れを温泉のり則ち走湯あり
 又古歌多し江島屋相模屋等の湯戸三四軒みよ浴室
 温泉の小瀑と設く清爽浴をべし此地熱海村を去
 る東北十八町即ち小田原驛の街道はつる
 ○網代港 熱海村の南海路二里すく多賀村を經て
 陸行をべし則ち下田港に至るの街道より然れど

遊覽の客を舟行と宜しと舟路を則ち錦浦と回り
 曾我濱を經て港は達を港民戸四百余船舶多く繋る
 東南山を越て根越の観音堂に至る曹洞宗長谷寺と
 称す門前の觀望す極めて奇絶あり本尊大和豊山
 同木同作ふと山下の巖窟より時々暴潮の為
 りと云ふ僧實參之と憂ひ此寺を創建して此は遷せ
 ○初島 熱海と去る海路三里東西七八町南北四五
 町の一孤島よして鎌倉の右大臣の箱根路を我越く
 まむ伊豆の海や沖の小島は浪のよる見ゆと詠ぜ

られたる沖の小島とて是あり民戸四十餘多くて漁
獵を以て業とあま初島神社あり木花香初木姫を祭
る此姫をドめて伊豆山の走湯を見出したまへりと
云ふ此島到る處水仙花多し民刈り以て肥糞とあま又
文殊蘭あり高さ五六尺に至り花葉長大頗る目と駭
うま又碩鼠の猫の如きものあり此他更は一丁の獸
畜を生むることありといふ

○鸚鵡石 三島驛に至る街道の南十數町の地は在
り田方郡丹那村に属し熱海と去る凡そ三里餘石の
高さ一丈六尺餘横六尺餘にして人語其他一切の音

聲木の石は響く大と聲響の間一毫と容れず竹溪の

記竹溪西原彰明和申は記は曰く冷聞記所稱南嶽岫

嶮峰之響石者欵と近來野火の災は罹り大は其響を

減ぜりといふ

○一杯水 多賀村の地は下田街道の傍はあり僅

は尺餘の小泉ありとも清く且つ冷あると水晶の

如く相傳ふ右大將頼朝の地を過りしとき渴は臨

て之と掬せりと此他駒形堂頼朝の馬と痊云峰山頂

り銚子口鬢の澤在家僧之と守る等數多の旧跡あり

とも今悉くを記さざ

○社寺并行殿旧墟

此地昔々伊豆神社の社領たり故に嘗て般若院の盛んあるや三千の支坊多くてこの辺に散在し随て種々の神社も亦多し是れ此小村にして社寺の數甚に多き所あり

○湯前神社 上町より天平勝寶中少彦名尊を祭

祭神の説述來異論ありといふ然れども予を問うり神祇の事と詳しうせざれむ且らく旧説は依る下より世々石渡氏神事と掌どる社前は石碑あり本社の來歴と畧記を文を信陽源通魏の撰にして書て江戸の東江源鱗と見ゆ明和七年九月石渡親由の建

る所あり石華表及び石燈籠二基ともは寶曆安永の頃又留米侯の寄附せる所あり

○來宮 上宿の北より五十猛尊を祭る熱海村の鎮守あり和銅三年の創立と係るといふ境内は大豫

樟樹二株あり神木と稱ま 大さ九十五六圍中身空

洞ありて數人と容るべし

○和田八幡 錦浦の西端和田磯より傳へて源頼家の信仰する所と云今僅に其旧墟を存す

○今宮 天神山の南より事代主尊を祭る和田村の鎮守なり老樹群立清陰蒼々たり

○天神祠 濱町の東より菅公と祭る相傳ふ菅公
 築柴と謫居せらるる日自う肖像七軀を刺しけり
 ふ本祠祭る所その一ありと祠と和田の天神山
 たり近古以来今の地は遷す内田氏神事を管
 ○紀の村の本の社 横町御成橋の南に在り柿の本
 の紀僧正と祭る里俗相傳ふ紀僧正真濟嘗て深殿后
 の事又坐せしめて此は謫居し終る死せりと此傳甚
 だ誤れり僧史と按むるは釋真濟を山城の人彈正大
 彌紀の御園の子として弘法大師十大弟子の一あり
 承和中勅と奉りて入唐し歸朝して東寺の長者と任

ト又僧正とあり貞觀二年二月廿五日高尾神護寺に
 遷化せといふ本朝高僧傳の論は曰く世人傳曰真濟
 惑色而成魔焉余常疑之中閱真言傳所引善家秘記始
 決疑矣曰金峯山比丘尼藤后之病見其容顏愛慕而作
 鬼魅入帳中夫清行時之鴻儒而見聞不誤其不閑濟公
 必矣云々と此説以了謬傳と正き足る而して未だ
 此地何よ由て此僧正と祭るを詳らうとせざ紀博昭の
 の事より轉記せし又濱町天神祠の境内より一石
 と傳へた深殿后の陵墓とあまぐ如きは至りてそ
 の傳會の甚だしき固より論むるに足るものあり

○温泉寺 清水山と称し新宿より臨濟宗妙心寺
 末あり勅謚神光寂照禪師授翁宗弼和尚の開創に係
 る和尚を万里小路中納言藤房卿あり僧史を按てる
 又卿を亞相宣房の子嘗て禪學を喜び退朝の暇を
 明極俊及び大燈國師に参り建武元年潛遁きて北
 岩倉に至り出家す時年三十八延元中関山國師妙
 心寺を開くは當り往て法脈を傳へ遂に妙心第二祖
 とあり天授六年三月廿八日端坐して化す時年八十
 五万治二年秋勅謚して神光寂照禪師と曰ふと見ゆ
 和尚の末に出家せざる後醍醐天皇は仕へて力を中
 興に尽されしこと未だ已に世人周知する所なれども

こが 贊 和尚の傳衣紹金の七條一肩あり寺の什寶
 と云 又中興雲居國師の九條衣及び念珠を藏すの傳
 下は興禪寺の庭前古松一株あり幽翠人を襲ふ傳へ
 て開祖の手植と云門前古井あり三点水と名く
 蓋し唐の悟達が靈水と三点して奇疾を治せしとい
 ふ故事に依り雲居の命を承りて熱海第一の甘
 泉ありといふ支坊慈照庵上宿あり俗に湯河原堂
 と稱し本尊地藏大士と安を相傳ふ治承年間右大将
 頼朝の開創に係ると延寶二年江戸の人久保田某
 た堂宇を興て而して今の堂を安政中温泉寺主雪源

其檀越石渡喜右衛門等の諸氏と謀りて建る所あり
 平沢惺侯の撰むる所の温泉
 寺記一篇有り本寺は藏せり
 ○興禪寺 和田村念佛山の麓より海岸山と稱す
 温泉寺と同ト授翁和尚の開創は係る寛永年間雲
 居國師中興を雲居國師年譜と按ずるは師諱を希膺
 土佐の人十五歳より出家し法を一宙和尚と傳ふ
 元和元年塙直之の為に大坂城に屯し死を決て東照
 公の容を得て妙心第一座となり又諸方を歴住し寛
 永七年の春遁れて熱海に至り興禪温泉二寺を中興
 を同し十一年元和法皇の勅請に應じ奏對旨は愜

ふ十三年仙臺中納言政宗の請に應じて松島瑞巖寺
 を中興す承應三年後光明天皇勅じて慈光不昧禪師
 の号を賜ふ万治二年八月八日端坐して化す壽八十
 八享保十九年六月特は勅じて大悲圓滿國師と謚し
 賜ふ國師生涯諸方を巡化し山を開き寺を興するの
 總て百七十三ヶ所よ及ぶといふ惜むべし當寺志を
 志す火災に罹り開祖及び中祖の遺物多く焼亡を然
 れども尚ほ本尊十一面觀音八寸五分藤房入道の護
 念佛に係り又雲居の法衣及び自贊の畫像等有り支
 坊延命庵神光庵に本僅し旧墟と見る 平沢惺侯の記

見ゆ而了今も焼く植り又入道遺愛の鞍及び念珠
 等も焼け雲居國師手
 植の松も今も枯たり
 ○海藏寺 又妙心寺末より水口村より佛徳廣通
 國師と開祖と一悟庵潛溪二師と中興とを其時
 代と詳くよせ境域瀟灑遊觀を堪へたり
 ○醫王寺 善述山と稱し濱町より昔も真言宗よ
 して伊豆山の末寺あり慶長十八年播陽大教禪師物
 外和尚中興し妙心寺末とある相模の早雲寺は蔵を
 札中は相州熱海醫王寺云々の語り之は依之と
 觀れよ此寺當時已に臨濟宗の地嘗て相模の末は属
 とせしと知るべし又熱海村の地嘗て相模の末は属
 とせしと知るべし又熱海村の地嘗て相模の末は属

一と境内に大田駒千代の墓あり駒千代を左衛門尉
 道灌の玄孫よして旧掛川侯の祖新六郎重正の兄と
 り永祿七年八月當寺の境内に自殺す時年僅に十四
 歳ありと云ふ
 ○潮音寺 主と和田村に在り妙心寺の末あり
 近年廢絶して其跡もすく求む難し
 ○大乘寺 本町湯前社の上より通廣山と稱し日
 蓮宗三島驛本覺寺末あり此寺と真言の道場あり
 一弘長二年の春日興上人六人の一來り住僧行滿
 と化度一夜と更へ宗と轉せしむ此は於て行滿名と

日行と改め興と請いて開祖と自ら茅二世に居れり時日蓮上人當國伊東に謫居せられ此盛事を聞き嘗て四十二歳の容貌と水鏡に写し自ら刻する所の肖像を興に附し當寺に安置せしめらるる今本尊前安置せるものは是なり又日蓮弘安の歳日親文明の歳二師の書せし曼荼羅を藏す本堂の後直に月と記す登る石階數十級七面祠あり眺望極佳境内は朝川黙翁の墓あり門前其子善庵が建る所の碑あり文龜田鵬齋書す大窪天民篆額す増山河州あり梵鐘あり文化年間鑄る所といふ

○誓欣院 法界山と稱し上宿より昔に真言宗より道光寺と稱す正保慶安の頃浄土宗僧善譽誓欣來り中興して明珠庵といふ後村民その徳を慕ふて誓欣院と呼びしと今を東京増上寺の末とある寛政年中住僧聽察村長今井半太夫に謀り寺を今の地に移し湯前社の東京蟠龍寺知本と請ふ本にれ長泉院の徳門普寂に譲り始め律場とあり寺域を結界す本尊阿彌陀佛相傳ふ惠心の作し千葉常胤の持念佛ありと隸する所の觀音堂荒宿よりと觀音の銅像百体と安き近年災に罹り今僅に

五十軀と存をといふ
 ○行殿旧墟 新宿の南より伊豆誌に曰く猷廟川
 三代将温泉と浴せんと欲し玉ひ寛永三年佐久間氏
 軍家光之と營せしむ既成る適々事たりて台駕
 命ト之と營せしむ既成る適々事たりて台駕
 遂に臨み後令して毀すしむ是より先き慶長九年
 三月神祖五郎太丸義利長福丸頼宣と携さへられ京
 より上り王ふ時熱海を經過し温泉に浴しすふこと
 一七日猷廟の例と追ひ玉ひしやと當時造営は
 關せし圖書類渡辺氏に藏せりといふ予内田氏が藏
 せる寫本に就く之を見たり其地五反餘熱海村の中

央よりとり平坦より眺望殊に佳絶あり西北老樹
 列あり茂り其外は溝を回らせし跡あり此辺里俗又
 傍ら馬場の跡あり近來此旧墟に就き熱海學校と
 建築せり校舍壯宏學事稍盛榮の色ありといふ

産物

熱海の地甚に狹隘三方山と回らせとも皆秃峯一方
 海を開るとも僅に釣漁は止まり田園耕作の地あり
 乏し況んや爾餘の品物と產生するの餘地はらんや
 蓋し日工集と按むると曰く應安七年二月十七日為
 湯醫往熱海畧中余乃次其韻題温泉廣濟接待庵の接待庵

詳らゝあゝの或人曰く今の温泉 寺是あゝんと蓋し或ひは然らん 接待知消幾杓湯病客毎今贅店榻詩人偏愛賛公房陶成什器輕於工者出官塩白似霜暫借僧窓同遠眺東南目斷水茫茫と此詩五六の句よいふ所は依て五百餘年前よの地は於て磁器を製し且つ塩を産せしと明りあり因て之と古老は問ふは昔一阪町の上二軒茶屋は於て盛んは磁器を製し又今の横磯と称する辺みち塩田あり又塩釜と稱然るに磁器を製する者何の頃より其人あり塩田を皆暴潮の為に奪ひ去られたり近來内田氏去まを興さんと欲し種々

力と盡しられとも遂は未だ其功を果さざると甚た惜むべしとあり而して今製産する所のものを僅に樟材什器雁皮紙壁土等の兩三種は過む
 ○樟材什器 材料を多く天城箱根諸山より出づ製する所の器具頗ぶる多し中は就く算笥書棚書物箱用書算笥針箱煙草盆廣蓋机火鉢等を尤も有用の具あり其他玩弄は属するもの數多しれとも悉くを記さず而して之を製するもの及び之を鬻ぎ賣る者亦十數家あり中は就く古來其業をさかんは營あり今本は益々怠たゞる者遠州屋庄右工門丸屋喜平福

田屋安二郎等ありとのり各家より轆轤製のりの塗物類等を併せ賣る又青木かよび柳よて製りたる箸数種より何れも浴客滞在中の需は應お何様にも製をべし

○雁皮紙 地棉を用ひて之と抄く地棉を和名をカゴと云ひ俗はガシビと称す木は櫻に似て四月葉を生じ此木處々の山間を生れとも十年を経ざれば用をふさぎ故は三叉楮と雜つて之と抄き唯薄葉と稱すもの純一の地棉を用ひて之と抄き熱海はあつて此紙を製し初めらるる柴野栗山の創意は出で今

井半太夫 義齋すく徳翁と此業を起し江戸本町一肆と開き又金花堂榛原等へ分ちて之と發賣せり爾來この業と當むもの漸く多く殊は方今を今井半太夫江戸屋吉兵衛植松五平神角善吉芥川由五郎等專ら力を此に盡すといふ

○壁土 熱海の地山溪田園到處往々この土を生じ青黄赤白その他の間色凡そ十七種ありみま壁と塗りて美しく且つ堅く中は就く金色及び銀色のものより光彩燦爛宮室の美觀を添ふは足る年来山田万吉と吉田屋といふもの此土を賣るを以て業とあり常

又東京その他へ運輸するもの甚だ夥多といふ○この他赤石脂薬用は供○塩温石鑛泉中は含む所の加自然は石の如○乾魚等の賣品はれとも其品少或は尋常のものとあれと敢て記さざ

熱海誌終

跋



東坡居士題

藹二居士浴于熱海月餘而還余往問病居士曰未癒又慰其加余疑曰予平生無病況今肢體肥壯顏色有潤抑有疴病乎居士曰吾病由緣而起見春花而傷焉秋月而悲是吾病也夏夜之涼欲納之冬曉之雪欲賞之又吾病也遇理而議當畢所記視語而歸之察惡而避之皆無非吾病也故行李南游且欲

熱海誌
 洗之。然對秀山而有詩。浴靈泉而有記。又見稼穡之艱。而思衣食之不易。察衆民之衰。而歎天下之不盛。終至作熱海誌之篇。唯其吾病有加。未如其減。天下多病。吾是以病。余聞之笑曰。熱海之水。焉能洗維摩之病。子夏南游。而謀諸善財。居士曰。噫。子亦放官之病未癒乎。頃日誌刻成。居士囑余記出。居士曰。未
 戊寅九月
 東洋居士識于石濱莊



明治十一年九月十八日版權免許

著述并出版人

埼玉縣平民

大内青巖

東京築地三丁目十八番地寄附

發行

豆洲熱海温泉宿

真誠社

同

同

石渡喜右衛門

賣捌

東京芝神明前

山中市兵衛

同

同 銀座二丁目

博聞社

同

同 南傳馬町三丁目

吉川半七

同

同 八官町

山内宗太郎

